

2列王記5章 9-14 節 「単純すぎる命令」

1A 自分なりの方法

1B 自尊心

2B 知的理解

3A 神の命令

1B へりくだりの従順

2B 幼子の肌

本文

列王記第二5章を開いてください。私たちは聖書通読の学びで、列王記第二3章まで来ました。今日の午後に4-5章を学びたいと思います。今朝は、5章 9-14 節に注目したいと思います。

9 こうして、ナアマンは馬と戦車をもって来て、エリシャの家の入口に立った。10 エリシャは、彼に使いをやって、言った。「ヨルダン川へ行って七たびあなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたの中から元どおりになってきよくなります。」11 しかしナアマンは怒って去り、そして言った。「何ということだ。私は彼がきつと出て来て、立ち、彼の神、主の名を呼んで、この患部の上で彼の手を動かし、このらい病を直してくれると思っていたのに。12 ダマスコの川、アマナやパルパルは、イスラエルのすべての川にまさっているではないか。これらの川で洗って、私がきよくなれないのだろうか。」こうして、彼は怒って帰途についた。13 そのとき、彼のしもべたちが近づいて彼に言った。「わが父よ。あの預言者が、もしも、むずかしいことをあなたに命じたとしたら、あなたはきつとそれをなされたのではありませんか。ただ、彼はあなたに『身を洗って、きよくなりなさい。』と言っただけではありませんか。」14 そこで、ナアマンは下って行き、神の人の言ったとおりに、ヨルダン川に七たび身を浸した。すると彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった。

アラム(あるいはシリア)のナアマン将軍の話です。私たちは前回、エリシャがエリヤに代わってイスラエル国の預言者になったことを読みました。そして、エリシャを通して数々の奇蹟が起こりますが、その一つが敵国の将軍のらい病を清めたことです。

ナアマンは、アラムにおいて極めて優れた軍人でありました。王にたいそう重んじられていました。数々の戦いで勝利を収めていたからです。このような優れた人物にも、大きな負い目がありました。らい病です。聖書では「らい病」という言葉が出てくる時は、必ずしもハンセン氏病だけでなく、他の重い皮膚病をも含みます。

たまたま、ナアマンが戦っていた時に、略奪物としてイスラエルの若い娘を捕えていました。そして自分の妻に仕えさせていました。彼女が、預言者エリシャのことを女主人に話したのです。その

ことをアラムの王に告げると、王はイスラエルの王にナアマンの病を治してほしいという手紙を送りました。イスラエルの王は、「俺は神ではない！ 治すなんて馬鹿馬鹿しい。単に偵察のために来るためだろう。」と言って怒りましたが、エリシャが人をやって、「彼を私にところによこしてください。」と言ったのです。

私はナアマンのことが好きです。なぜなら、ナアマンは異邦人だからです。だから、キリスト教に全く接したことのない、教会で何をすればよいかさっぱり分からない人には共感できることがたくさんあるからです。イスラエルの神がどのような方であるか、またイスラエルの預言者がどのような存在であるか、ナアマンは全く知りませんでした。彼は、国家間の特別な計らいで、難病指定の病気をたとえ敵国であってもそこにいる名医に診てもらい、と心から信じて行ったのです。それで、多額の金と価値のある晴れ着をもって行きました。ところが、後でエリシャは、「そんなものは要らない。」と行って頑として受け取らなかったのです。

私が初めに教会に行った時のことを思い出します。献金袋が回って来て、「何か支払わないといけないかな。」と思ってお金を入れたのですが、間違っって必要なお金まで入れてしまったのです。貧乏学生だった私は礼拝が終わった後に、「すみません、一部お返ししてもらって良いですか？」と言ったことがあります。今思い出すと本当に恥ずかしいですが、献金の意味も何も知りませんでした。興味深いことに父は、その反対の反応をしました。私がクリスチャンになって両親を教会に連れていきましたが、献金の時間になった時に、私が父に、「これはイエス様を信じる人が、神さまに感謝したいから捧げるものだから、お父さんはお金を入れなくていいからね。」と言ったのですが、父は頑として言うことを聞かず、「何を言っているのだ！ お前も世話になっているのだから、きちんと支払うのが礼儀だろ。」と言われてしまいました。ちょうど、ナアマンみたいな感じですね。

そうしたナアマンは、エリシャの家の入口にまで行ったのですが、エリシャは、自分自身は出て行かずに使いを出して、こう言わせたのです。「[ヨルダン川へ行って七たびあなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだ元どおりになってきよくなります。\(5:10\)](#)」この言葉を冷静に考えてみましょう。こんなに簡単なことはありません。第一に、ヨルダン川まで行きます。第二に、七回、その川の中に自分の体を浸します。この二つの手順だけです。

ところが、ナアマンは非常に怒りました。第一に、エリシャが直接出て来なかったことが極めて無礼だと思いました。国賓のようにしてやって来たのに、この対応は何なのだ！ と怒っています。第二に、彼自身が自分の手を使って、主の名によって祈ってくれると思っていたのに、と言っています。直接手で触れなければ、効果が足りないではないか！ ということです。第三に、ダマスコにある川のほうがヨルダン川なんかよりも優っているではないか、と言っています。これは、自国の川に対する誇りですね。

1A 自分なりの方法

ナアマンのこの反応は、イエス・キリストの福音のところに来ない多くの人の反応と同じです。つ

まり、神の良い知らせを信じて、受け入れるということはとても簡単な行為なのに、その簡単なことが何らかの拘りで一歩踏み出せない、ということです。

ローマ 10 章 6 節から、パウロは、神の救いがいかに近いところにあるかの説明をしています。「しかし、信仰による義はこう言います。「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と断言してはいけません。」それはキリストを引き降ろすことです。また、「だれが地の奥底に下るだろうか、と断言してはいけません。」それはキリストを死者の中から引き上げることです。では、どう断言していますか。「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。」これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです。(6-8 節)」

神の救いを得るためには、自分がそれ相当の努力をしなければいけないのではないかと私たちは思うのです。天に上る、地に下る、というような修行をして、初めて救いを得ることができるのではないかと、思うのです。けれどもパウロが言っているのは、「もうすでに地に下られた方がいる。キリストがあなたの罪のために死なれて、墓に葬られ、陰府に下られたのだ。そしてもうすでに天に上げられた方がいる。キリストはよみがえって、天に昇られたのだ。」と断言しているのです。そして、救いは「この神の言葉にある。だから、目の前にあって、あなたの口と、あなたの心にあるのだ。」ということです。神がキリストにあって既に行なわれたこと、その言葉を受け入れて、心で信じて、そして口に出して言い表す。このことによって、救いを得ることができる、ということでもあります。

けれども、心で信じて口で告白するということが、どうしてもできません。どうしてかというと、ナアマンのように自分でしなければいけないことが、もっとあるはずだと思います。また、神の救いというのはこうあるべきだという自分の拘りがあります。そして、自分の誇りにしているものを捨てなければいけないけれども、それはできないと思うからです。

それでも、自分の問題は解決していません。ナアマンがらい病を患っているように、しばしば、らい病は罪を象徴するものとして聖書に描かれています。同じように、私たちの罪によって起こっている問題は全く直っていません。どんどん問題は積っていくのですが、けれども、「こんな簡単なことによって救われるはずがない。これだけの負い目があるのだから、自分のほうでもっと大きなことをしなければいけないのではないか。」と思うわけです。

だから、他の宗教は大変繁盛します。病に伏している人から、何百万という金額を巻き上げることも可能です。それは、「これだけのお金をつぎ込めば、あなたの病は治る。」と約束するからです。けれども、イエス・キリストの福音はこう教えます。「あなたは、一円玉さえも、献金袋に入れる必要はありません。あなたの負債は何百万円ではなく、実は破産状態です。何兆円、いやそれ以上の借金があります。でもイエス様が全額を支払われたので、一円玉も入れなくて良いのですよ。この方を自分の人生の中心に受け入れてください。」と断言しています。けれども、これはできません。

しばしば私たち牧者や宣教師が集まる交わりの中で、日本の人たちが「恵みを受け入れるのが

難しい人たちだね」という話になります。自分自身は一生懸命、人に与えようと努力するのですが、相手から与えられたものを断ってしまいます。あるいは、ただでもらえるとなると、福袋のように争い奪い取るように貪ります。感謝がないのです。ですから、恵みをもって受け入れる勇気とへりくだりが必要ですね。子供のように、「ありがとう」と言って、素直に受け入れられる心が神の恵み、そして神の救いを知るのに必要な要素です。

1B 自尊心

アラムにおいては有能であり、そしてイスラエルに来た時も礼を失せずやって来た真面目なナアマンでしたが、そのナアマンが非常に怒りました。彼の表向きの謙虚さは、この時点でぶっ壊れてしまいました。彼には、プライド、自尊心があったのです。ナアマン將軍の僕の言葉に注目してください。「わが父よ。あの預言者が、もしも、むずかしいこと(直訳は「大きなこと」)をあなたに命じたとしたら、あなたはきっとそれをなされたのではありませんか。(13 節)」獅子と戦って、それに打ち勝つならあなたは癒される、と言われたらできたのではありませんか？ということ。自分に困難が課せられ、それに立ち向かって克服すれば清められると言われたら、それを行なったでしょう？ということ。

私たちが、「自分はきちんとできないから、神の命令を行なわない。」という真面目さがあれば、ここで、はっきりさせましょう。それは二つの言葉にまとめられます。一つは「高慢」です。もう一つは「不従順」です。ナアマンのように表向きは礼儀ある動きをしており、正当な怒りのように思えますが、聖書の神の前ではプライド、あるいは高慢であり、そして、主が与えておられる命令に従わないという不従順であるということになります。

キリスト教を紹介する漫画で面白い一場面がありました。「今は罪が多すぎるので、今は教会に行けないが、片付いたら行くつもり。」と考えている人に対しての喩えです。場面は、レストランの食事のテーブルです。会社の同僚らしき人が、お酒のグラスを持ちながらこうつぶやきます。「僕は肝臓と肺がめちゃくちゃで、おまけに高血圧と糖尿病持ちで、あらゆる病気に冒されてるんだ。」それで本人は、「何だって！ だったらすぐ病院に行けよ。」ところが、同僚はこう答えます。「いや、良くなってから行くよ。」本人は、文字通り、目が黒くなって点になってしまいました。開いた口が塞がりません。それで説明があるのですが、もちろん、病気になったら早く病院に行くように、罪の多い人間は教会に行くのが当然です。けれども、キリスト教があまりにも高い生き方を求めて、人々を挫折させていると多くの人言うのですが、それは、人間の弱さを助けてくださる神様がいるという事実をまだ知らないからだ、ということに締めくくっています。

自分がきちんとしてから教会に来るのではなくて、そのままの姿で神のところに行き、自分の弱さに完全に働いてくださる神の恵みを経験するのです。パウロはこう言いました。「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。(2コリント 12:9-10)」ありのままの姿で来るのは、へりくだりが

必要です。自分のだらしない姿を神に見られるわけですから。でも、神は実はそのだらしない姿をすでに知っておられるのです。それを、勇気をもって神の前に出て行き、明らかにすることが、聖書の言う「罪の告白」になります。

2B 知的理解

ナアマンがヨルダン川に行くのを拒んだもう一つの理由は、「理解ができない」ということです。ヨルダン川に行って、七度、水に浸るだけでどうしてこのような難病が治るのか？知的に理解できないので困難だった、ということが言えるでしょう。

聖書は、神の命令は単純でも、自分の知性が試されることが数多くあります。有名な話は、青銅の蛇です。モーセがイスラエルの民を率いて荒野の旅をしていました。食べ物がいつもマナしかなく、民はモーセにつぶやきました。それで神は、燃える蛇をイスラエルの宿営に送り込まれました。その毒で多くの人が苦しみ始めました。民は、「私たちは主とあなたに対して罪を犯しました。」と言いました。それでモーセが神に祈ると、神は、「青銅の蛇を作り、それを旗竿にかけなさい。その蛇を見るものは、生きる。」と言われました。モーセが造ると、実に、その蛇を見る者たちは死なないうで、生きることができたのです。(民数 21:4-9)

そこの宿営にいることを考えてみましょう。自分は蛇に噛まれました。毒が体中を回っています。そして大声でこんな言葉が聞こえます。「蛇を見るんだ、旗竿の上の青銅の蛇を！これを見れば、生きるのだ。」そこで、その旗竿の蛇を見た者は、たちまち苦しみをやみ、治りました。そこでまだ苦しんでいる者たちに言うのです。「ほら、見ろ。このように治るんだぞ。」けれども、拒みます。「なんでだ！ただ見るだけで治るなんて、ありっこないじゃないか。」見るなんて、ものすごい簡単な行為なのに、「そんなことはあり得ない」として見ないで死んでいくのです。

こんな滑稽で悲しいことはありませんね。けれども、イエス・キリストの福音を拒むということは、同じことをしているのです。自分は罪の中で死んでいるのに、そしてその罪のためにキリストがすべての代価を支払ってくださったのに、それでもキリストのところに行こうとしないのは、「なぜ、キリストだけで十分なのか自分には分からない。もっと他にしなければいけないことがあるでしょう？」という思いがあるからです。

3A 神の命令

けれども、ナアマンはヨルダン川に行きます。これは、彼のしもべの助言を聞き入れたからです。

1B へりくだりの従順

13 節を見てください。「わが父よ。あの預言者が、もしも、むずかしいことをあなたに命じたとしたら、あなたはきっとそれをなされたのではありませんか。ただ、彼はあなたに『身を洗って、きよくなりなさい。』と言っただけではありませんか。」簡単なことを行なうのには、へりくだりが要ります。これは、大学教授に対して、小学生の算数の計算を要求するようなものです。けれども、ここに神の

権威に対して従うという、子どものようなへりくだりがあるのです。イエス様は言われました。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。(マルコ 10:14)」

子供扱いされているように感じるかもしれません。けれども、神はご自分の愛する子どもとして、私たちをご自分のところに引き寄せたいと願われているのです。誇り高き日本人の男性、女性としてではなく、ただ素直に神を父として仰ぎ、その命令に従う子どもとして招きたいと願っておられるのです。誇り高き日本の男性、女性と言っても、実は自分の心はカラカラでしょう。つよい孤独感を抱いていることでしょう。このまま自分の努力や経験で生きようにも、空しく死んでいくしかなくなるでしょう。らい病を持ったままで帰ったナアマンのようになってしまうでしょう。けれども、しもべの助言を聞いたナアマンのように、主が語っておられる命令に、そのまま従えば良いのです。

聖書には、このように子供のように、神の言葉をそのまま行った者たちに、神の大きな業が現れた証言がたくさんあります。ペテロは極めてプロ意識の高い漁師でした。そして、舟が傾くほどの大漁の恵みにあずかりました。けれども、それは夜通し漁をして、一匹もとれなかった後に、イエス様から、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい。」と命じられたのです。このプロの漁師はこう答えたのです。「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおこぼれどおり、網をおろしてみましよう。」(以上、ルカ 5:1-11)

ここの「でも」が大事です！確かに経験上は、絶対に魚はとれないのです。この経験を否定しているわけではありません。多くの人が、「私がこれまで築いてきた経験を、この場で無きものにしなさいということですか。」と反発するのですが、いいえ、無きものにすることはなく、退けるのです。イエス様の命令に従うために、その経験と知識が邪魔になるから、一先ず横に置いておくのです。そして、神に自分を従わせます。そうすれば、弱くされたその自分に神が大いなる恵みを注いでくださいます。

2B 幼子の肌

そしてナアマンがエリシャの言葉、すなわち主の言葉に従ったその結果を見たいと思います。14節、「ナアマンは下って行き、神の人の言ったとおりに、ヨルダン川に七たび身を浸した。すると彼のからだは元どおりになって、幼子のからだのようになり、きよくなった。」。すばらしいです、皮膚がかさぶたのようになっていたところが、幼子のからだのようになりきれいになりました。私たちは、幼子の肌のみずみずしさはよく知っていますね。小さな子たちの肌、また髪の毛は、テレビのコマーシャルに出てくる、きれいな女の人のシャンプー後の髪の毛よりも、ずっときれいだと思います。幼子の皮膚も瑞々しいです。そのようになったのです。

そこで日本語の訳ですが、普通、からだ、また肌は、「きれいになった」と言いますね。けれども、「きよくなった」と書かれています。これには理由があります。イスラエルの中では、らい病は単に皮膚がかさぶたになったり、膿が出てきたりして、汚くなっただけではなく、象徴的に神の前で汚れ

ているものとされました。重い皮膚病の姿が、自分の罪によって生活も体も蝕まれている姿を表象していたのです。その症状が治る時に、したがって「清められる」という言葉を使うのです。

イザヤ書には、ユダヤ人が宗教活動を行なっているけれども、一向に彼らの生活が変わっていないことを嘆いている神の言葉が書かれています。「もう、むなしいささげ物を携えて来るな。香の煙・・それもわたしの忌みきらうもの。新月の祭りと安息日・・会合の召集、不義と、きよめの集会、これにわたしは耐えられない。(1:13)」彼らはこうした活動には熱心だけれども、肝心の正義を行なうことについて無頓着でした。それで、「洗え。身をきよめよ。(16節)」と主が命じておられます。

この呼びかけに応答した人々に対する神の約束が次です。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようにになる。(18節)」どんなに、これまでの罪や不義が積み上がっていても、どんなに自分が汚れた人間だとしても、神の清めは完全であり、徹底的なのです。緋というのは、血が固まった色です。どんなに洗浄しようと除去できないシミの色です。けれども主は、雪のように白くすると言われます。そして同じように紅のように赤くても、羊毛のように白くしていただきます。使徒ヨハネも同じことを言っています。「しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。(1ヨハネ 1:7)」

キリストの血は、私たちの罪をすっかりきれいにしていただきます。ナアマンが幼子の肌のようになったように、きれいになります。そして、キリストの血だけでなく、キリストの砕かれた肉体が私たちに用意されています。「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。(イザヤ 53:4-5)」自分の過ち、自分の罪、自分のわがままによって、体に病はないかもしれないけれども、心と魂に傷を負って生きてこられたかもしれません。でも、イエスは病の人となってくださいました。私たちの病をご自分の体に置いてくださいました。鞭打ちを受けられることによって、その痛みを受けてくださいました。それは、私たちの魂が癒されるためです。

そして、私たちの魂が癒されるだけではありません。イエス様は、体の癒しのためにも傷を受けられました。ですから、体に病を持っておられる方も、どうかそのまま、この方の痛みを思って、神の約束を受け入れてください。子供と同じように、これまでの重荷を振り払って主のところ近づいてください。